

ヤツメ予算の思い出話

三林昭夫

私のテーマは、「石狩川ヤツメ文化保全再生事業」誕生の秘話ならぬ、予算獲得までの事情やアプローチについて書くことです。

当時（と言っても5、6年ほど前のことですが）、江別漁協は、激減するヤツメ資源の回復を望み、調査研究の実施を水産孵化場や石狩支庁に要望し、また石狩漁協も同じように資源回復を望んでいました。石狩支庁水産室は何度か水産林務部に要請しましたが、ヤツメはローカルな課題ということで取り上げられません。水産孵化場も、その頃は予算付けが無いので本格的な研究は出来ないという状況でした。

しばらく、ヤツメに何の手だても得られない状態が続くなかで、石狩川の秋サケ地曳き網漁を再現した「北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業」が、石狩支庁の地域政策推進事業（総合企画部（企画振興部）予算）として実施され、これに関わった水産室は、この地域政策予算が、支庁独自の事業展開が可能で、使いでの良い予算との認識を深めることになりました。

そこで早速、水産関係事業での採択が難しく懸案であった石狩湾の底質対策に地域政策予算を使って取り組みを開始し、“管内の課題解決は、やはり現場の工夫で、金はあるところにはある。”という訳で、さらに、秋サケの密漁対策には経済部の雇用対策予算を活用しました。

そうこうするうちに、ヤツメの漁獲量がますます落ち込み、危機的状況になってきたので、水産室ではヤツメ対策を立ち上げることにし、資源回復に向け、生態や増殖手法の調査研究、漁業者や採捕者による資源管理などを内容とする事業を企画して、これを石狩支庁の平成16年度地域政策推進事業に提案しました。このときの石狩支庁長は、前職で総務部総合防災対策室長を務められた方でしたが、事業計画のヒアリングの際、ヤツメに関わる文化を取り入れて事業の必要性を整理するようにと指示されました。そうすれば地域政策推進事業としての的を射たものになり、厚みが増すということでした。このように「文化」を前面に出すアイデアは、実は、支庁長の識見から生まれたものでした。さらに石狩支庁の中の窓口である地域政策課からは空知支庁と連携した広域事業としたほうが採択されやすいとアドバイスされました。

事業の必要性は、ヤツメが、地域の「食文化」、「風

物詩」、「生態系」、「生物多様性」に重要であることなどから整理し、市民や関係者による「ヤツメを考える会」を事業計画に加えました。広域連携は空知支庁林務課（水産主査）に快諾されました。事業初年度の予算額はおよそ50万円でした。これは、前述のように石狩川から石狩湾への流出物・堆積物を調査し、底質環境の改善を考える事業（石狩水圏好適環境創造事業）を地域政策推進事業として平成15年度から実施している、その2年目の予算額確保のため、ヤツメには大きな額を要求できなかったのです。

平成16年2月19日（木曜日）の北海道新聞朝刊は、

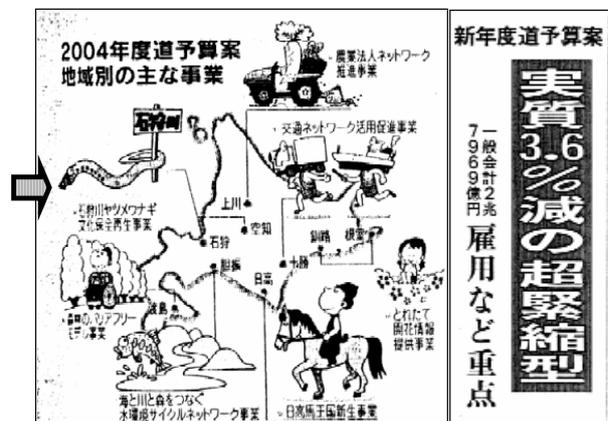


図1 平成16年2月19日北海道新聞朝刊の記事
（「超緊縮型」予算の中、採択された事業（矢印））



図2 事業の成果を普及する孵化技術研修会で挨拶
（水産孵化場職員として再び石狩川ヤツメ文化保全再生事業に関わることとなりました）

表 石狩川ヤツメ文化保全再生事業の概要

事業名	石狩川ヤツメ文化保全再生事業(石狩・空知支庁独自事業)
事業の概要	近年、ヤツメ資源の著しい低下から、ヤツメの食文化の消失等が危惧されるため、資源を維持・回復してヤツメ文化の保全・再生を図り、地域の活性化に視することが必要である。 このため、関係者の連携・協力により、生態調査研究の連携を実施し、生息場等の保全・再生への生態学的知見の反映、漁業者等の意識啓発を進め、さらには河川環境事業の伸展やヤツメ採捕努力量の軽減を図っていく。
予算規模	総額 7,118 千円 平成16年度 533 千円 平成17年度 3,528 千円 平成18年度 3,057 千円
参加機関	北海道工業大学、酪農学園大学、流域生態研究所、北海道栽培漁業振興公社 水産孵化場、石狩支庁、空知支庁

「2004年度道予算案 地域別の主な事業」を紹介していましたが、そこにヤツメのイラスト入りで「石狩川ヤツメウナギ文化保全再生事業」が載っていました。さっそく反響があって、石狩川開発建設部などから問い合わせがあり、江別市役所も大きな関心を示しました。江別漁協には事前に話していました。支庁長は、50万円の事業が大きな宣伝効果を生んだと感想を述べられました。

こうして、ヤツメ対策の事業は始まることになりました。その直接的な目的はヤツメ資源回復による内水面漁業の振興ですが、資源回復には河川事業や農業排水との調整によって産卵場や生育場の環境を保全することが不可欠で、そのためには、漁業関係者は無論のこと、地域住民、世論を味方に付け、開発事業者も農業関係者も含めた合意形成の下で、それぞれが資源回復のために出来る手だてを講じる状況をつくる必要があります。そのポイントは地域住民の理解を広げ、世論を喚起することだと思いました。

ヤツメは内陸の貴重な水産物として地域の食文化を豊かにし、生活の中に根付いて、資源回復に対する住民の潜在する期待も大きいと思われ、また、地域の生物多様性・生態系の維持・回復が地球環境を守る基礎となる点からも、希少種になりかかっているヤツメの資源回復は地域住民の理解を広げることができ、その地域の声と取り組みを世論形成へ反映させようと考えました。

ヤツメ対策を立ち上げたのは、江別漁協の組合員にいつまでも漁業を続けて漁協を守り続けてほしいという願いがあったからでした。組合員の生計のためにも、川とそれが直結する海の世界維持のためにも。漁民と漁業権の存在が、高度経済成長期における石狩川の水

質汚濁とその防止対策運動の歴史を紐解くまでもなく、過去においても、そしてこれからも、水産生物の棲息環境の保全に大きな力を発揮するものと考えられます。勿論、水族の繁殖保護を業務とする水産孵化場の存在もまた然りです。

さて、話を戻します。石狩川ヤツメ文化保全再生事業(「ウナギ」が無いのが正式名称です。)については、予算が付き、新年度からの実施に向けて準備に入ったわけですが、その頃、水産室では、こんな話がされていました。“百の議論は大事だが、何よりも実行する人が一番偉い。”と。また、“ただやれば良いというものではない。どうやったら良いか、良く考えてやらなければならない。”と。この言葉を体現していた人が近藤章二係長(当時)でした。

近藤さんは、持ち前の実行力と折衝力並びに地域振興業務への適性を大いに発揮して、漁港漁村係長のときには、前述の北海道遺産石狩川歴史・文化伝承事業のコーディネートをを行い、石狩川の秋サケ密漁対策においてガードマンを統率して活躍し、また、平成16年度に漁政係長になってからは、水産孵化場をはじめ大学や関係機関との協力体制を構築し、漁業者、採捕者、住民を結んで、石狩川ヤツメ文化保全再生事業の成功に大きな貢献を果たすことになったのです。私はというと、本事業の予算付けを見た後、異動しました。

これで私の思い出話は終わります。末筆になりましたが、ヤツメの援軍の輪を大きく広げ、大きな成果を収められました関係者の皆様のご尽力に、深甚の敬意を捧げる次第です。

(さんばやし あきお：総務部長)